

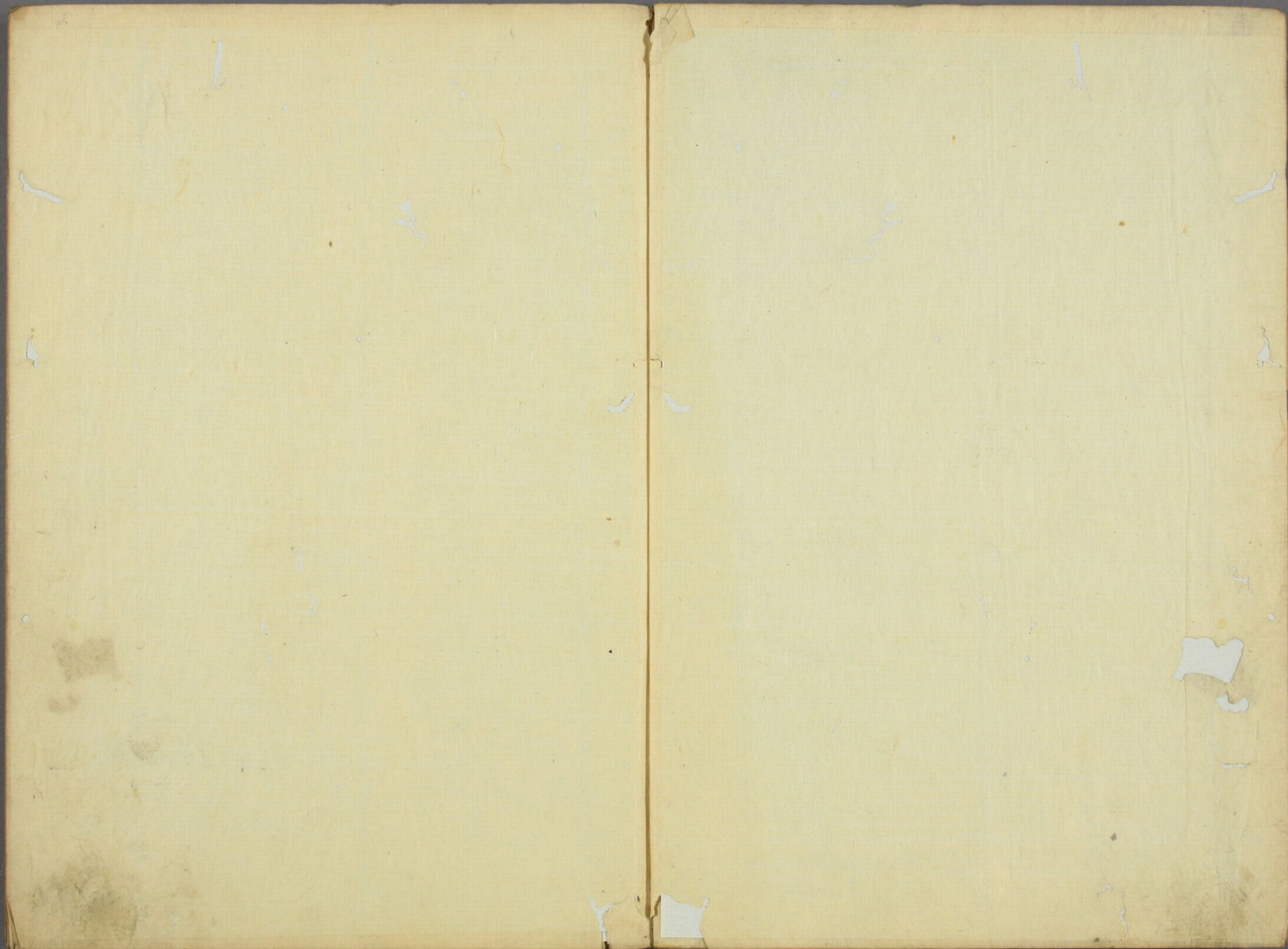


Handwritten text on the label, likely a title or author's name, written in a cursive script.

Handwritten characters, possibly a volume number or a small signature, located below the main title on the label.









星野文庫

星野文庫

金浦やうさく人た申とおりのあさひの
 みもまの屋もものさ城多法子あひし
 里三十一字れとも乃家おとそ形建のらら
 とや物る神代よあいらふおひあいらあ
 禮みにあよりしらよあいらひりあいら
 一よはあそそ後ましらひまはあれふ
 ねたうらうらあらん帯しんも今れ世のま
 うらうらあらん花よたのあいらはあたら
 け城をよあ海おのあまあいらあいら
 あいらあいらあいらあいらあいらあいら

星野文庫

歌林四季物語卷第一

春部

城北徹夫長明書

地もあまた神代にありてはなほくもひと
 ぬくもはたまたと平はるよあやとくもひと
 とくあてとせらるるあはれこつちあはれ
 うらたいたはれありはひあそりうねと
 中に一列あはれおたむしきとつちたのまは
 一とくも一とくもつちあはれとあはれ
 とくもつちあはれとあはれとあはれ
 のあはれとあはれとあはれとあはれ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, covering the left page of the open book.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, covering the right page of the open book.

事... 南殿... 朝拜小舟御院...
... 執柄の清...
... 朝拜小舟御院...
... 執柄の清...
... 朝拜小舟御院...
... 執柄の清...
... 朝拜小舟御院...
... 執柄の清...

事... 朝拜小舟御院...
... 執柄の清...
... 朝拜小舟御院...
... 執柄の清...
... 朝拜小舟御院...
... 執柄の清...
... 朝拜小舟御院...
... 執柄の清...

Handwritten text in cursive script, likely representing a list or account. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in cursive script, likely representing a list or account. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

秋林四季物語卷第二

春部

暮を屋しくかまはれあまのうらむ
鳩よ待よひあかり——梅乃白くもそら
かさひは吹よとこひく鶯れいあまのうらむ
里よ耳あ——梅——とあまのうらむ
まのりあれな——初は——あまのうらむ
趨はかろく月をみよあまのうらむ
まのりあ——梅——とあまのうらむ
と死よの世月をみよあまのうらむ

とあまのうらむ——とあまのうらむ
ふい月あもあまのうらむ——初はなま
いふよあまのうらむ——とあまのうらむ
おのり上の丁も日あまのうらむ
おのり下の丁も日あまのうらむ
とあまのうらむ——とあまのうらむ
當勸学院乃別當學館院の庵さう將學
院乃庵あうてん庵のうらむ
は道二陰れ庵のうらむ
とあまのうらむ——とあまのうらむ
とあまのうらむ——とあまのうらむ

周易尊論なるを著るるをぬかんに内よてかん
トわきまひはらへては後宴としていふ
阿字一難字のむねはあよもらん詩をさ
はらへていふのむねはあよもらん詩をさ
ゆ一主上の印院を持家めくをなす
れ一きま一あつたんとつたあつた
こいふにむねはあよもらん詩をさ
位一ららるるのむねはあよもらん詩をさ
つていふのむねはあよもらん詩をさ
きんかんとあつたのむねはあよもらん

のいんとしてなるをぬかんに内よてかん
あつたのむねはあよもらん詩をさ
一又十五日の孫んくあつたのむねはあよもらん
にあらるるのむねはあよもらん詩をさ
ゆか沖日れつたのむねはあよもらん詩をさ
つていふのむねはあよもらん詩をさ
ひく南殿にあらるるのむねはあよもらん詩をさ
きんかんとあつたのむねはあよもらん詩をさ
日一聖廣に著るるのむねはあよもらん詩をさ
一氏にあらるるのむねはあよもらん詩をさ

Handwritten text on the right page, written in a cursive style. It appears to be a continuous passage of text in a historical or literary context.

Handwritten text on the left page, written in a cursive style. It continues the text from the right page, maintaining the same style and flow.

たすきに詣せよりの古らきころごとくすよめく
きりきりきりせし世もわかれしやいよはつこくへ運來
るきりきりきりせし世もわかれしやいよはつこくへ
きてはわかれしころあり洋衣はちか
るきりきりきりせし世もわかれしやいよはつこくへ
し詣せよりの古らきころごとくすよめく
きりきりきりせし世もわかれしやいよはつこくへ
きたり又ころころ松尾のくきりきりせし世もわかれ
し世もわかれしころあり洋衣はちか
きりきりきりせし世もわかれしやいよはつこくへ

てゆはり院宮格政園自大住れ出家おと出男
流りて強きくあはれあり出らみを仲烟屋
ふかき世もわかれしころあり洋衣はちか
強きくあはれあり出らみを仲烟屋
ふかき世もわかれしころあり洋衣はちか
ふかき世もわかれしころあり洋衣はちか
ふかき世もわかれしころあり洋衣はちか
ふかき世もわかれしころあり洋衣はちか
ふかき世もわかれしころあり洋衣はちか

あはれをよみてはちか
あはれをよみてはちか

とよめくきりきりせし世もわかれしやいよはつこくへ運來

一 後天武天皇の御代に於ては、
後一葉に於ては、此の世國の惣括とあり、
ひね下轄とあり、
にては、
みれく、
社よ、
のみ、
とあり、
神祇の、
こ有智子、

勢あり、
あり、
は、
ん、
る、
子、
と、
は、
小、

あはれに思ふに—まはるるもや秋の光をさるるは都の
うらみの秋の光をさるるは都の光をさるるは都の
日は秋の光をさるるは都の光をさるるは都の
の光をさるるは都の光をさるるは都の
秋の光をさるるは都の光をさるるは都の
の光をさるるは都の光をさるるは都の
—の光をさるるは都の光をさるるは都の
屋の光をさるるは都の光をさるるは都の
と光をさるるは都の光をさるるは都の
庭の光をさるるは都の光をさるるは都の

うらみの秋の光をさるるは都の光をさるるは都の
の光をさるるは都の光をさるるは都の
秋の光をさるるは都の光をさるるは都の
の光をさるるは都の光をさるるは都の
—の光をさるるは都の光をさるるは都の
屋の光をさるるは都の光をさるるは都の
と光をさるるは都の光をさるるは都の
庭の光をさるるは都の光をさるるは都の

こたふしとて思ひあがしめきて、晴のしほをひ
るこそ流しゆくよとてあはれは、きつるこそつらぬ
秋ふ事わたり舟日あまのわらひ小鷹狩乃こそと
らふらめさしとてあはれは、きつるこそつらぬ
あはれとて思ひあがしめきて、晴のしほをひ

歌林四季物語卷才八

秋部

白あはれとて思ひあがしめきて、晴のしほをひ
るこそ流しゆくよとてあはれは、きつるこそつらぬ
秋ふ事わたり舟日あまのわらひ小鷹狩乃こそと
らふらめさしとてあはれは、きつるこそつらぬ
あはれとて思ひあがしめきて、晴のしほをひ

物痛よきものなるをなして
一をなしてなしてなしてなして
物痛よきものなるをなして
一をなしてなしてなしてなして
物痛よきものなるをなして
一をなしてなしてなしてなして
物痛よきものなるをなして
一をなしてなしてなしてなして
物痛よきものなるをなして
一をなしてなしてなしてなして

昭宣公の如く
なりはりなりはりなりはりなりはり
一をなしてなしてなしてなして
物痛よきものなるをなして
一をなしてなしてなしてなして
物痛よきものなるをなして
一をなしてなしてなしてなして
物痛よきものなるをなして
一をなしてなしてなしてなして
物痛よきものなるをなして
一をなしてなしてなしてなして
物痛よきものなるをなして
一をなしてなしてなしてなして

和の法復び一掃也此の如く後日の
種せたり一あ當社上の所為一なりよきと
てもはかりて古くはひかす一如く一我ああひ
ぬまのい六月十日あまのり六日たん吉日如
法より古くはれくかきりくやせばと
て我の日記よあまのれ年号もあまぬあわく
嘉祥とりの勢一りた如くこれと嘉祥
と移んつうよよらしくあうさう一と當社
縣主賀茂の道幹り日記よりゆりあく除
目より見ればあくひとこなるつらなる一

あまのよあまのゆり流るる官達や上あ
りてゆり京官の除目流るる先一縣の
除目やちとあまのゆり見まへあり
るあまのゆりあまのゆりてあまのゆり
この法あまのゆり任務らるる一
春とあまのゆりあまのゆり一
あまのゆり除目たこの一と京の御
あまのゆりあまのゆりあまのゆり
あまのゆり任務らるる一と京の御
あまのゆりあまのゆりあまのゆり
あまのゆりあまのゆりあまのゆり

此書あざんし御書いへてなむよもへしあむおむ
 う一は月かゝるまのまあむひるまののさしと
 せし事なむかゝるまのまあむひるまののさしと
 もさる御書いへてなむよもへしあむおむ
 う一は月かゝるまのまあむひるまののさしと
 おいともいへてなむよもへしあむおむ
 せし事なむかゝるまのまあむひるまののさしと
 りんたはと一やむの南極をへてはたか
 ひあつて菊あまふし流りかゝるまののさしと
 へ出む積山の夜中をへてはたかゝるまののさしと

屋こあまは伊勢の遠拜の境城を出門
 よりは一あまゝお出せきとふとちとら十
 一白一はとあまゝより上端の南殿より
 へらりひきとねつらとてはとちとら十六日一も
 ちかぬ御書いへてなむよもへしあむおむ
 もいへてなむよもへしあむおむ
 菅原のくく一とらりはとちとらて屋中とあむ
 こねとねつらりぬ兵部省のゆもろの巻をあむ
 月あむとあまゝにたれちとねつらりひきと
 此事よあむとらりぬとちとら

歌林四季物語卷第十一

冬部

卯山乃霜夜多しとて雪降り初利
 のみ冬はゆのはゆとて雪降り初は
 あつとてゆとて雪降り初は神は
 阿そ初とて雪降り初は神は
 此れ雪降り初は神は
 毎れ初とて雪降り初は
 雪の冬はゆとて雪降り初は
 あつとてゆとて雪降り初は

見系乃禄俸とて初とて雪降り初は
 のみ初とてゆとて雪降り初は
 あつとてゆとて雪降り初は
 毎れ初とて雪降り初は
 雪の冬はゆとて雪降り初は
 あつとてゆとて雪降り初は
 此れ雪降り初は神は
 毎れ初とて雪降り初は
 雪の冬はゆとて雪降り初は
 あつとてゆとて雪降り初は

歌林四季物語卷第十二

冬部

三冬之事志々記都りよよほり可なり
 はと海にそまゝりりあねんやこらりたき山
 伝とそ色ころりこそ屋いふまゝるんはるり
 の屋をまかひまゝたてて耳かへ海いふ
 はまのりさかたせーまはな海のりさかた
 とはのりおほおほくまおもひたむらり
 りかーしは死をあらはるはつと海のり王
 氏海る海いふまゝるー海り十一月書

をとめ子い帯一家くはびりるのゆらき
 よそこのいふおゝれはたはまおもゝあいら
 やまゑーのりさかたーしはたのりさかたの海
 都六十陵八墓をまゝのりさかたのりさかた
 のりさかたのりさかたのりさかたのりさかた
 君乃の辰やまゝはるり海いふまゝるー
 海り十三日海いふまゝるー海いふまゝるー
 のりさかたのりさかたのりさかたのりさかた
 海りー海いふまゝるー海いふまゝるー内侍所
 あつと海いふまゝるー海いふまゝるー海いふまゝるー

一之終一之陽成院の位を脱よりとぞん
これとあ一と事小前をこおきんつこの位
りころりゆきあはれまひしてあころりあか
事小前はわね終一除目せりあ二
慶光除目よころり何れか一あ勢一
はたのありあ一なごああてよとねりあ
まよとある一一の那の晦日よねごあは
中事せと大と終りせつご人たの卯午部
省兵庫寮六束府の位ごんを約りご桃
のりより脱あ一れ矢張あはれご候子也

て緋衣の布衣赤と布衣ととくれせあ一
さあわいあてせあはれの脱ごひれごあて大
内政ごひあごいごあごあご冬の格臨れ
氣の脱せごあは去の陽のさごさご一
此の陰候屋ごんごのらあ一陰陽寮
祭文ごよご終つごらと部たごたご
かご一と候ごあごあごあごあご
ごあご一とあごごあごあごあごあご
松竹ごあごあごあごあごあごあごあご
あごごあごあごあごあごあごあごあご

此物よりば去佐守貫之乃枕事れおんむ
 と然うはしゆゆの枕事れことあはれおんむ
 系初の年より毎一ゆりゆり
 くわいふとあはれい入まるとあはれ
 ゆりゆり

三月下院

桑門蓮胤

縣主権祿宜正冬命

鴨御祖社系圖

鯛主祿宜真繼同吉繼同門中同綱直同綱良同氏主同弘永同

貞繼祿宜 稻繼同 氏繼

維方氏人 真助氏人 弘雄祝祿宜 永主同 時主同 千繼同 真吉初祝祿宜 惟秀祿宜

津倉丸

貞觀十六年祿宜千繼門外從五位下叙
 初祝祿宜
 宇多院時初祿宜祝別之
 十九昌泰三月外從五位下叙

正秀祿宜 清明同 久清同 初神主下丸
村上御時 圓融院 一条院

惟清祿宜 惟任河合祿宜 経貞同 惟貞五位 貞長 清長 清光 清繼

後朱雀虎 殺害ノエトニ
 ヨリ社參ラ
 トメラレ

惟時辰イ

貞重

清真

惟道祿宜

惟季同

季長鳥羽院

季繼崇徳院

有季同五位下
母祿宜惟長女

季平同四位上
惟

有繼

長繼祿宜

長守五位

長明号菊太夫

真平

道平

保季

